

サテライトという選択肢 ～地域生活支援・共同生活援助事業を考える～

希望の丘はだの 地域生活支援課
土屋紀子 矢浦将人 永井啓介

1. はじめに

希望の丘はだの地域生活支援課では、「サテライト(本拠地から離れてその機能の一部を担い、常に交信可能な場所に設けられた施設)という選択肢」と題して、今後の方向性に関する現在の取り組みについて紹介いたします。

2. 希望の丘はだの地域生活支援課の 取り組みと役割

希望の丘はだの地域生活支援課では令和3年度現在、平塚・大根地区で8か所、秦野今泉地区で6か所の合計14か所、79名の定員でグループホームを運営している。

職員体制は生活支援員として常勤8名、非常勤6名と各ホームの世話人66名で、利用者のホーム生活を包括型共同生活援助というかたちで支援を展開している。

利用者の障がい支援区分の平均は区分3であり、区分1から区分6まで幅広い方が生活をしている。利用者の日中の過ごしとしては、生活介護を利用している方、就労継続支援A型、就労継続支援B型の作業所に通っている方、また、一般就労をしている方と、多種多様のニーズに合わせた支援をしている。利用者の平均年齢は40歳で、20歳の成人の方から64歳の企業年金を開始された方まで、幅広い年齢層の利用者がケアホームタイプまたはアパートタイプという、その方にあった生活スタイルのホームで生活をしている。

地域生活支援課としての役割は、次の3つであると考えている。

- ①施設入所や在宅での生活から地域での生活を目指している利用者の受け皿としての役割。
- ②就労やホーム生活を継続できるように支援する役割。
- ③必要な支援があれば地域での生活が送れる方

を受け入れて支える役割。

3. ホームの紹介

秦野精華園の地域生活支援事業は平成3年の5月からグループホームを開設し、地域や利用者のニーズに沿って第15ホームまで拡大しながら事業を展開してきた。平成30年に、第1ホームはばたき寮が老朽化と家賃価格のバランスが合わず閉鎖となり、現在14ホームでの体制で運営している。14か所のグループホームは、伊勢原市内にある1ホームを含めて秦野精華園周辺の平塚・大根地区に8ホーム、秦野今泉地区に6ホームの2つのタイプのホームを展開している。ケアホームタイプが9棟、アパートタイプが5棟あり、ケアホームは基本的に夜間も世話人を配置して夜間体制を組んでいる。世話人は必ずしも各ホーム専任とはいかず、複数のホームを掛け持ちしている方もいる。

4. ホームの課題と現状

秦野精華園のホーム運営をするにあたり、以下のような課題がある。

(1) 建物や設備の老朽化

現在運営しているホームの建物は、はじめからホームとしてオーナーが建築したホームもあるが、築40年の一軒家や単身のアパートを改修して使用している。そのため、外階段でつながるケアホームがあり、支援の不都合な部分がある。ホームの設備が老朽化してきており、給湯器やエアコンの故障や、排水の詰まりなど補修をすることが増えている。

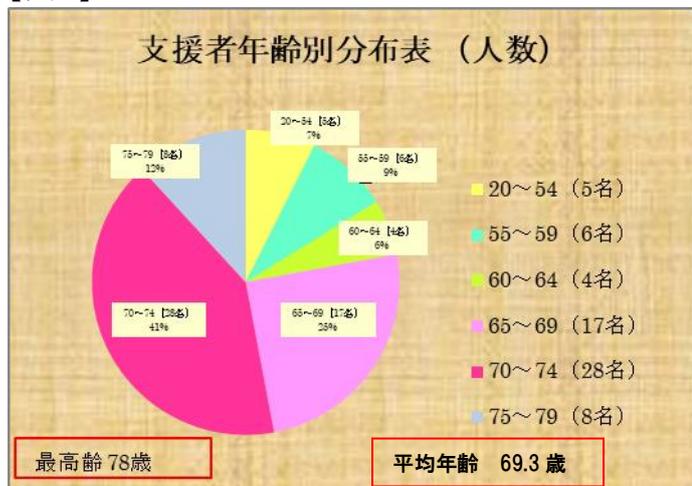
(2) 世話人の確保が困難

世話人の確保のためにハローワークや募集ポスターを掲示しても応募者が集まらず、支援が困難な状況がある。その理由として、ホームの支援

時間が朝の6時から9時と、夕方16時から20時までの早朝と夜間の細切れの短い時間帯、または、支援時間が夕方から翌日などの16時から翌日の9時までの宿直というような支援時間の募集となり、勤務時間帯が特殊である。また、支援の内容が食事や生活の業務だけではなく、知的や情緒の障がい特性がある方の支援であり、専門的な障がい特性の知識や利用者支援に理解力のある人材が求められる。そのため、未経験者や自身の生計を保たなければならない人は、収入的にも踏み込みにくい要因があると思われる。現在世話人として勤務されている方々は、子育てを終えて一段落した方や、定年で会社を退職した方などの年齢層でセカンドキャリアとして働き始めた方や、長年この仕事に携わっている方々のみとなっている。新たに就業し始める方の数より、病気や怪我など高齢を理由に休まれ、辞めていく方の数が上回っている状態である。

(図1)のように世話人の高齢化が進み、圧倒的なマンパワーの不足となっている。

【図1】



5、サテライトタイプグループホームの選択へのきっかけ

選択のきっかけは、第1ホームはばたき寮が建物の老朽化と家賃のバランスがあわず閉鎖となった。それに代わるホームの建設が中期計画にあり、建設に向けて動きを始めた。現在もオーナーとの関係性も良好で、秦野精華園という安定した施設運営を展開しているため、地域生活支援のグループホームへの入居のニーズも高いと思われた。

しかし、世話人の確保や高齢化する世話人の世代交代が進まない現状もあり、建物を建設したとしても地域生活を支える支援者の確保が望めないのでは、新ホームの設立は難しいと判断した。それでは、どのようにしたら希望する利用者の地域生活を送る手段があるのかを考慮した時に、サテライトタイプの制度があることが分かり、事業展開が可能なのか考え始めた。

6、サテライトタイプグループホームの説明

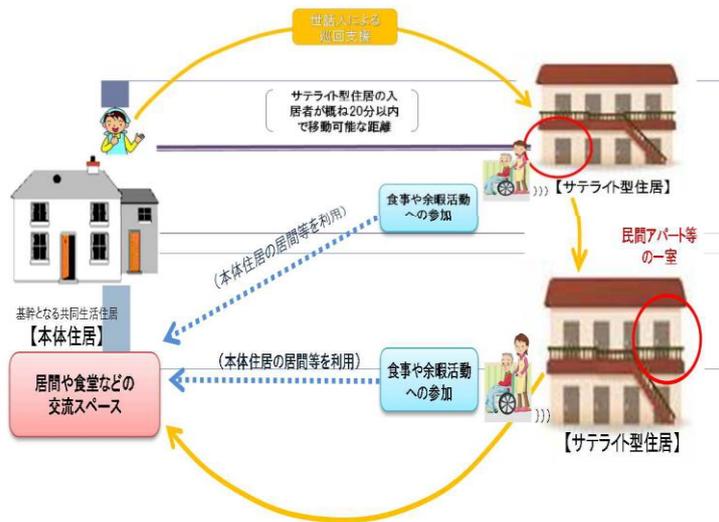
(1) サテライトタイプホームとは

「サテライト」と聞いて思い浮かぶのは『衛星』というイメージである。サテライトとは、(図2)のように「本拠地から離れてその機能の一部を担い、常に交信可能な場所に設けられた施設」という意味である。左側の建物がグループホームであり、これが「基幹ホーム」になる。右側にあるのが、アパート等のサテライト型住居となる。これまでのグループホームであれば、1棟まるごとで事業を行っていたが、サテライト型では1部屋のみオーナーと契約して、グループホームとして支援を行なうこととなる。

【図2】

サテライトとは

本拠地から離れてその機能の一部を担い、常に更新可能な場所に設けられた施設



(2) サテライト型ホームの規定

サテライト型ホームには様々な規定がある。

① 本拠地となるホームから概ね20分以内の距離

で1つのホームに1～2部屋の設置が可能。

②設置できる部屋数は、本拠地となるホームの定員が4名以下であれば1部屋。5～6名であれば2部屋が可能。

③サテライト型のホームの1部屋の定員は1名。生活スペースはひと部屋あたり(4.5畳)以上で、収納以外には風呂、トイレ、洗面所、台所など、適切な生活スペースの確保が必要。

④本拠地または支援者と通信ができる携帯電話など、連絡体制や手段の確保。

⑤支援計画に沿って、訪問や見回りなど必要な支援を行なうこと。

⑥家賃補助が適応されている。

7. 利用者のニーズについて

(1) 利用者の声

サテライトを進めるにあたり、利用者のニーズ調査の取り組みを行なった。その中で8名の方が、興味があるとの話をされる。

3名の意見を抜粋して紹介する。

①「やがて一人暮らしがしたいと思っているけど、いきなり一人で暮らすのは不安。経験を積めるホームがあるといいな。」

②「食事とか他の人と食べたり、顔を合わせるとちょっとストレスとなったりするから食事は準備して欲しいけど、一人で過ごしたいかな。困った時に助けてもらえばいいし。」

③「あまり職員とか世話人から干渉されたくないけど、生活費のやりくりや大きな金額の出し入れの時、あとはサービスの更新や手続きなどは、難しいので手伝って欲しい。困った時は相談できるとありがたい。」

(2) Aさんの事例

Aさんはケアホームで生活していたが、他入居者からの干渉やコミュニケーションにストレスを感じるようになり、周囲との間に溝ができてしまった。感情が不安定になり、世話人や他入居者にストレスを向けるようになっていった。私たちは、Aさんの「個の環境」を作り出す必要性が有ることをみいだした。また、本人からも「いつかはアパートタイプへ」との移行の希望が挙がっていたので、家族などを含め話し合いの場を持ち、同意を得て3年後にアパートタイプへの移行が実現することができ

た。

その結果、他者からのストレスが軽減され、自分のペースで生活を送れることができるようになった。

早い時期にサテライト型ホームという選択肢が増えていたら、もう少し早く「個の環境」の中で、快適な生活を送ることができたのではないと思われる。私たちは「必要な支援があれば地域で暮らせる」という視点に注目し、必要な支援として「個の環境」を提供することが、現在のアパートタイプであり、新たな選択肢としてサテライトが挙げられる。

(3) サテライト型を選択

以上のような地域生活支援課が抱えているマンパワー不足の問題と、利用者の多種多様なニーズを通してみると、新ホーム設立の代案として、「サテライト」という制度を活用できないかとの結論に至った。

理由としては以下の4つが挙げられる。

①拠点となるホームの世話人が食事提供などをするので、マンパワー不足の解消になる。

②サテライト型は3年の期限だが、基盤が出来たらそのまま個人の契約に切り替えて地域の生活が続けられる。また、本人の状況に合わせて支援の延長も可能。

③契約の期限が短いので不都合があれば、物件を変更する等の方法がとれやすい。

④「個の環境」の場が得られ、ストレスが軽減できニーズに応えることができる。

8. UCHI(うち)ホームの見学内容

私たちは、サテライト型ホームを運営している茅ヶ崎にあるグループホームUCHIを見学し、理事長の牧野氏にお話しを聴くことができた。見学をしたUCHIでは、それぞれ必要な環境として提供しているケースが多数をしめていた。利用者の中には一見障害があるように見えず、そのギャップに悩まされ、人間関係の構築が上手くできず、「生きにくさ」を抱えている人が多くいるとのことだった。

個の生活を送りながらも、拠点となったホームに集まった時には、世話人のみならず他入居者と

令和3年度 体験交流セミナー①

もコミュニケーションを行なう中で、個々を高め合いながら利用者同士が協力するなど、様々な生活スタイルでの利点があることに気付いた。

また、牧野理事長の「ステップアップを目的としているわけではなく、その利用者にサテライト型がっているからその事業をしている」という言葉にとっても衝撃を受けた。「サテライト型」のみならず、支援の原点を振り返る良い時間となった。

「自分にはどの生活スタイルが合っているのか。」など、利用者のニーズを聞き体験してもらい、その方に合った生活の場を一緒に探していきたい。

9、これからの展望について

現在、アパートタイプに住んでいる利用者を中心に移居の検討を行っている。2名の方が候補者として挙げられており、1名は50代の男性でアパートタイプでの生活を10年以上送っている方、もう1名は30代の女性でアパートタイプでの生活を6年送っている。どちらも最近一人暮らしをしたいという希望が挙がっており、サテライト型の生活が合っているのではないかと考えられる。候補者が決定し、どこで生活したいか、本人と話し合いを重ね、そこから本拠地のホームを決定していくこととなる。

秦野精華園の立地は東海大学近隣ということで、アパートも数多くある。今年4月、利用者の趣味である水槽のたこ足配線から出火するという小火災があり、その火事の際は短期間ではあったが、サテライトのような環境下でアパートを一室借用し、リフォームが終わる1ヶ月間生活をする事となった。この経験からも、サテライトを運営できる土壌が秦野精華園周辺にはあるのではないかと考察した。これから取り組みを行なう事業となるので、成果を発揮するのはまだ時間がかかると思われるが、今後の地域生活支援課のホーム運営に大きな1歩となればと考えている。

10、まとめ

今回の体験セミナーでの発表やUCHIの見学を通じて、地域で暮らすことは、ケアホームからアパートタイプ、アパートタイプから一人暮らしへ等、ステップアップすることばかりに目を向けるのではなく、その方一人一人に合った生活を考えることが大切だと再認識することができた。今後、地域生活支援課では「一人暮らしをしたいがまだ自信がない。」「どこでどのような暮らしがしたいか。」